



## 大島正隆、家族への手紙

著者	佐藤 健治
雑誌名	東北大学史料館紀要
巻	6
ページ	73-100
発行年	2011-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/49943">http://hdl.handle.net/10097/49943</a>

## 大島正隆、家族への手紙

佐藤 健 治

大島正隆（1909～1944）は、東北帝国大学法文学部国史研究室（現東北大学文学部日本史研究室）の卒業生で同研究室の副手を勤め、黎明期にあった東北中世史研究を精力的に開拓した人物として知られる。東北大学史料館には、「大島正隆文書」として研究に関わる調査記録や大学の受講ノートをはじめ、彼のキリスト教信仰や私生活に関する資料が300点以上残されている。その全体的内容は「東北大学史料館所蔵「大島正隆文書」目録」<sup>(1)</sup>に詳しいが、ここで翻刻紹介するのは、そのうち正隆の書簡37通（すべて家族宛）である。

このほとんどが新出史料であるので、受け入れの経緯を記しておく。2010年7月、ご高齢にもかかわらず正隆の令弟である大島智夫氏が東北大学史料館を訪れられ、正隆が1933年獄中より母宛に書いた書簡4通を御寄贈いただく。8月にその御礼を兼ねて智夫氏にお話をお伺いする機会を得、大学院文学研究科柳原敏昭氏・史料館曾根原理氏が神奈川県海老名市の智夫氏ご自宅を訪問、この時さらに正隆関係史料38通を御寄贈いただいた。ここに紹介するのは、今回御寄贈頂いた史料のうち、家族に宛てた正隆の書簡35通に以前から知られた2通<sup>(2)</sup>を加えた37通である。これにより戦中の東北帝大の様子や研究状況など外的環境のみではなく、卓越した研究者だった正隆を支えた家族とその信仰的側面など、研究業績のみでは知り得ない人間大島正隆の一面を窺い知ることができよう。

まず正隆の経歴を簡単に紹介しておく<sup>(3)</sup>。正隆は大島正満・今子夫妻の長男として1909年に生まれる。1928年第二高等学校に入学し、山岳部に入って登山に熱中する一方、共産青年同盟二高班の結成にも参加し、社会主義運動に身を投じる。1933年治安維持法違反の嫌疑により検挙され、翌年釈放、東京の自宅に戻り、キリスト教信仰を深める一方、柳田国男より民俗学を学ぶ。1936年4月東北帝国大学法文学部国史学科に入学し、同学科の古田良一教授・喜田貞吉講師や、同大学基督教青年会の石原謙教授の指導を受ける。1939年3月卒業、4月同大学国史研究室副手となる。正隆は、当時法文学部に設置されていた奥羽史料調査部の活動により、東北帝国大学に寄託された秋田家史料の整理・調査を中心的に行い、目録を作成している。また1941年東北帝大入学時からの住まいである仙台市北三番丁の菅恭助方を引き払い、同大学基督教青年会寄宿舎に入舎して後輩の指導にあたっている。1942年東北学院高等学部にて国史の講義を担当し、翌1943年「満洲」（中国東北部）に出張するが、帰国後健康を害して、9月以降千葉県勝浦に転地療養するも、1944年1月逝去する。34歳であった。

今回紹介する正隆書簡は1933年12月から1944年1月までのものであり、内容的には治安維持法違反嫌疑による獄中からのもの、東北帝大入学当初のもの、隠岐や東北各地・朝鮮・満洲など出先からのもの、母の病気に関するものや弟たちへの励まし、仙台での近況、千葉県勝浦町の療養先でのこと、戦時下の生活を思わせるものなど多種多様である。以下、書簡の内容に即して若干の解説を試みたい。

①から④までは、正隆が「仙台市片平丁四〇番地」＝宮城県監獄片平丁支署から母今子宛に出した封書である。正隆は第二高等学校の民主化運動の延長として共産青年同盟二高班結成に

加わり、そのキャップとして活動し、1933年1月11日に検挙される。取調中の壮絶な拷問にも耐え、1934年1月4日予審が結審、2月公判が開始され、執行猶予となり保釈される。公判ではじめて我が子の姿を見ることができた母今子は、それまで正隆との面会が許されなかった<sup>(4)</sup>。このようななかで1933年12月正隆が獄中から母に宛てた手紙である。このとき母にかわり正隆に面会したのは、父正満の妹佐保を妻とした松本光であった。

⑤は正隆が1936年4月東北帝大に入学して間もないころの、父宛の手紙である。父から贈られたヘーゲルの新刊本に感謝しつつ、法文学部での講義の様子、大学の食堂のメニューとその味について、寄宿先の菅宅の様子など記している。

⑥は1937年1月、正隆が東京から仙台へ戻る途中、福島から投函した弟正泰宛の葉書である。正泰の見送りを謝し、車窓から眺める安達太良山や平地、もんぺ姿の子供達の様子を記す。

⑦は1938年8月1日民俗調査先の隠岐から弟正明に宛てた絵葉書である。正隆は東北帝大入学前から柳田国男より民俗学を学び、柳田の主宰する山村調査と海村調査に参加している。正隆の担当は島根県隠岐郡都万村（隠岐島）と岩手県九戸郡宇部村小袖であり、1938年7月29日から8月18日まで隠岐での調査が行われた<sup>(5)</sup>。

⑧も同年9月19日弟正明に宛てた葉書であり、仙台行きの見送りを謝している。しかし深夜にビール瓶を振り回して駅員を迫りかける場面を見て、戦時下の人心について嘆いている。

⑨から⑪は、1938年10月に青森県十和田・猿倉温泉から北海道函館に渡り、盛岡をめぐる時の弟寛・正泰宛の絵葉書である。寛宛の絵葉書は3枚組だったが、1枚目は残されていない。⑨⑩は十和田の植生に関する記事。⑪正泰宛は函館の遺愛女学校や盛岡でのことなどを記し、盛岡からの帰り平泉郵便局にて風景印を押して発送された。葉書の左下部が欠損している。

⑫と⑬は、1940年6月に史料調査先の秋田・青森や山形の様子などを弟正泰宛に記した絵葉書である。正隆の手帳によれば、同年5月30日から「秋田大館史料調査行」となっている<sup>(6)</sup>。⑭は同年10月、法文学部奥羽史料調査部の仕事として「秋田家蔵品展覧」を終えたあとの近況などを正泰に伝える。数日後にまた庄内秋田方面への出張を控えて<sup>(7)</sup>、骨休みの山小屋行きや映画「オリンピア」の鑑賞、新響（新交響楽団）のプログラム予定に合わせた帰省など、正隆の趣味の一端を知ることができる。また⑬の消印には「貯蓄報国」、⑭には「國債の力で築け新東亜」と見え、世相がうかがえる。

⑮から⑰は、1941年8月から10月まで正泰宛の葉書である。これらは正隆兄弟の仲の良さ、正隆の面倒見の良さを示している。9月12日の⑯では正泰に対して、養子に行った弟久芳健夫へ『旧約知識』はあれだけだと伝言するように記している。これは「早稲田ノ古本屋ニ頼ンデアツタ聖知、新知、旧知、嘉信等ノ製本ガデキテ来マシタ」「注文ノ関係上、兄サンノ所ニアル旧知ノ残部ヲ、ナルタケ早く送ツテ下サイ。」<sup>(8)</sup>という健夫の要望に応えたものであり、大島一家の信仰の一側面である。

⑱は、母今子が脳溢血で倒れたので、1941年秋正隆は正泰宛として弟たちに今後の大島家の運営をどのようにしていったらよいか、心づもりを送っている。ここには家事をやってくれる女中は仙台でもなかなか見付からないこと、脳溢血の1回目の発病は必ず良くなること、病人に一番大切なことは平静であること、そのため特に来客など外部からの刺激は極力抑えること、父はじめ家族の心配事はみな神の手に委ねてしまうことなど、原稿用紙9頁分の内容であ

る。1941年9月7日弟健夫が正隆に宛てた葉書には、「典子ガ二三日熱ヲ出シタ外、父上ヲ始メ小生等皆元氣デス。」と家族の状況が記され、母今子のことについては、「母上ノ病院ニハ日ニ2回、誰カガ行ク事ニシテキマス。コノ頃ハ左手モ少シハ動ク様ニナリ、御氣分モ段々平靜ト思ハレマス。」<sup>(9)</sup>と記されている。

⑳も家族思いの正隆の一面が表れている。弟正泰はピアニストとして初ステージを踏むこととなり、正隆は正泰に心の持ち方をアドバイスしている。㉑は、1941年12月4日同じく正泰に宛てた近況報告である。大学では連日徴兵検査が行われ、しかもみな合格していることを伝える。この年は卒業年限が繰り上がり、東北帝大では12月28日卒業式が行われており、正隆の葉書はその前の臨時徴兵検査の状況を示している<sup>(10)</sup>。また消印には「貯めよう！勝たう！」と印字され、戦意高揚を図った時代であった。

㉒と㉓は、1942年2月と3月千葉県勝浦町の療養先から正泰に宛てた葉書である。この年の1月30日正隆は「一刻も早くと思い立つ」て東京から千葉県勝浦町新官の押塚家にたどり着く。途中「盛んに咳が出、好もしくない痰が出」て、夜も「へモ痰」が盛んに出たという<sup>(11)</sup>。㉒では一日中療養している様子、㉓では療養の甲斐あって3月17日に帰宅予定であることを知らせている。

㉔と㉕は、1942年5月と9月の正泰宛に速達として出された封緘葉書である。内容はどちらも金の無心が用件であるが、㉔には茨城県大津海岸にて石原謙を囲んでの研究会のこと、㉕には正隆に二高臨時講師の話が来たが東北学院との兼務に健康上の不安があったため断ったことなどを記す。

㉖は、1943年4月6日正泰宛の葉書である。正泰からの問い合わせに対する返答で、メトロノームを仙台中探したがすでになかったことなどを記す。

㉗から㉘までは、1943年5月満洲出張の途次、母今子・弟正泰宛に出された葉書である。正隆の手帳によると、正隆は同年3月31日満洲国へ出張発令となり、4月27日大東亜省より旅費が送付される。5月4日仙台を発ち東京によってから、同7日東京を出発、下関経由で翌8日釜山に渡る。9日慶州、11日・12日は京城に滞在して李王家美術館（徳寿宮）と京城博物館を参観し、15日満洲新京着。17日新京を発って奉天着、18日旅順に到着し、その後新京に戻り、ハルピンまで行ったのち帰国している<sup>(12)</sup>。㉗と㉘は、5月12日朝鮮京城から今子と正泰に出され、京城の町の様子を記するとともに、博物館の陳列品について賛嘆している。㉙は、5月17日満洲奉天から正泰に出され、奉天の町の様子や物価を記している。

㉚は、1943年8月7日両親宛に出された仙台からの最後の手紙という<sup>(13)</sup>。正隆にとって「基督教の信仰を一生静かに生き抜くことだけが大きな問題」であり、仙台を離れる時期が来たのではないかと考えている。

㉛から㉜までは、1943年10月から1944年元旦まで母今子・父正満・弟正泰宛で療養先の千葉県勝浦町から出された葉書である。正隆は1943年9月11日勝浦に転地する。正泰や友人石原純の来訪、戦時下の勝浦の状況などを記し、また療養中の心境や弟健夫の出征などにつき詠んだ和歌を記している。正隆は手帳に「上総の海」と題して和歌を書き溜めており<sup>(14)</sup>、葉書に記された和歌はその一部である。㉜は1944年元旦の父母宛賀状であり、父・母・弟妹達への言葉につづき、自分のことも病が癒えてこの地から巣立ちたいと書き記していた。しかし

1月12日午前七時卒然と永眠する。これが正隆の絶筆となった<sup>(15)</sup>。

---

注

- (1) 佐竹輝昭・佐藤健治・曾根原理・七海雅人・柳原敏昭・山田仁史「東北大学史料館所蔵「大島正隆文書」目録」(『国史談話会雑誌』51、2011年)。目録は東北大学史料館のホームページ(<http://www2.archives.tohoku.ac.jp/>)でも公開している。
  - (2) この2通は、1983年2月11日に行われた「大島正隆記念会」において大島家より配布された私家版『歌集 上総の海 大島正隆遺稿』(「大島正隆文書」I-18-2)所載の2通である。
  - (3) 遠藤巖ほか「大島正隆略歴」(『東北中世史の旅立ち』そしえて、1987年)。
  - (4) 大島智夫「茨の冠 大島正隆の生涯」(『東北中世史の旅立ち』そしえて、1987年)、柳原敏昭「東北帝大入学前後の大島正隆」(『東北中世史研究会会報』18、2008年)。
  - (5) 大石直正「大島正隆の民俗学 ―『東北中世史の旅立ち』補遺―」(『国史談話会雑誌』28、1987年)。
  - (6) 「大島正隆文書」I-1-3。
  - (7) 正隆の手帳(「大島正隆文書」I-1-3)によれば、1940年10月28日から11月3日まで秋田庄内探訪とする。
  - (8) 「大島正隆文書」I-15-3。1941年9月7日大島正隆宛て久芳健夫書簡。
  - (9) 同上。
  - (10) 『東北大学百年史1 通史1』東北大学、2007年。
  - (11) 「大島正隆文書」I-1-3。
  - (12) 「大島正隆文書」II-37、朝鮮・満州旅行記メモ。
  - (13) 『歌集 上総の海 大島正隆遺稿』(「大島正隆文書」I-18-2)。
  - (14) 「大島正隆文書」II-37、朝鮮・満州旅行記メモの巻末。これをもとに『歌集 上総の海 大島正隆遺稿』(「大島正隆文書」I-18-2)が作成された。
  - (15) 『歌集 上総の海 大島正隆遺稿』(「大島正隆文書」I-18-2)。
- (追記) 本稿を記すにあたり、柳原敏昭氏を通して大島智夫氏よりご教示頂きました。記して謝意を表します。また本稿校正中、大島智夫氏から新たに正隆書簡が東北大学史料館に寄贈されました。最新の大島正隆文書については、史料館ホームページを御覧ください。

## 大島正隆書簡

## 凡例

本稿は東北大学史料館所蔵「大島正隆文書」のうち、2010年7月と8月の2回に分け、大島智夫氏より寄贈を受けた大島正隆書簡35通、および『歌集 上総の海 大島正隆遺稿』所載の書簡2通、合わせて正隆書簡37通の翻刻である。

書簡の翻刻は年代順に配列して通し番号を振り、年月日・形態、「大島正隆文書目録」（『国史談話会雑誌』51、2011年）の番号を付した。原文はすべて縦書きである。

翻刻に用いた記号は以下の通りである。

□ 字の欠損      ■ 字の抹消      』 改ページ      [ ] 校訂者注

## ① 1933年12月5日（封書、便箋3枚）Ⅱ-1

## 〔封書表書〕

〔宛〕  
□京市目黒区中根町一八三三番地      大島今子様

〔消印「□□ 8. □. □」〕

## 〔封書裏書〕

仙台市片平丁四〇番地      大島正隆  
十二月五日      昭8（推定）  
〔異筆〕

## 〔本文〕

廿七日のお便り嬉しく拝見しました。

こちらへ来て頂ける様なお話、何よりも嬉しく感じました。実はこの前のお葉書で當分、その機会もない事と多少がつかりして居た所だつたのです。昨今はもう自分の心情も全く確定的な方向に落着いて居ます故、この様な妙なわびしい場所でお目にかゝつても、お心を暗く悲しいものにおさせする様な事ばかりでもありますまい。その日をお待ちして居ます。たゞ時間が極めて制限されてるさうですから、ゆつくり心ゆくまでといふ具合には行きかねるでせう。

豫審の模様など詳しくはお知らせしてありませんでしたが、今までに終了したのはたゞ以前の事実調べだけで、現在の心境とか将来の問題とかについてはいづれ又その中お調べがあるでせう。そのためのものとして先日豫審終了後、今日までかゝつて、今の僕がマルクシズムを如何に見るのかについてを陳述書に書いて居たところです。近くこれ』を豫審判事さんの所にまわして頂けるでせう。判事の方は、中年の如何にも厳格さうな方の様に感じました。今の僕の眞実の状態をよく了解して頂けるかどうか、何だか心配の様な気がします、とに角できるだけの誠心をもつて、お調べを受けて行くつもりです。

陳述書をかくのに氣をとられて、なつかしい■■■弟達の便りにまで返事をかくのを延引してた様な状態、大分方々に手紙の不義理をこさへてしまひました。

この頃、新らしい本がなくなつていさゝか淋しさを感じて居ます。それに近頃は検閲が馬鹿に手間取つて、もう一月半にもなるのに、この前の独逸語の本がまだ入つて来ず、甚だしいのになると、九月に購入したスピノーザの哲学書が未だに検閲中などいふ時間を超越した話を聞かねばならぬ状態ですから。何か手頃なものがありましたら送つて頂けませんか。今、第一書房から出て居るプラトン全』集の「メノン」（一、五〇銭）買つて頂きたいと思ひます

が、いかがでせう。いつでもいゝですからおついでに節お願ひしたいです。それから祖父上<sup>〔大島正健〕</sup>に本郷の小父<sup>〔大島正徳〕</sup>さんの「英国哲学史」、もしおあきでしたら拝見させて頂けませんかどうか伺つて見て下さい。——英国の功利哲学ではなくて新ヘーゲル学派と現代实在論について学びたい考へで居るのですが。

健夫君<sup>〔弟〕</sup>の珍奇なる考へ方、可笑しさを禁じ得ぬ感がありました。小さい人達の話、いつも嬉しく読んで居ます。早くそれにしても皆に会ひたい感がつのります。

時間がありませんから、それでは又、今日はこゝで打切らせて頂きます。どうか御大切に。

## ② 1933 年 12 月 13 日（封書、便箋 2 枚）Ⅱ -2

### 〔封書表書〕

〔東〕京市目黒區中根町一八三三番地 大島今子様  
〔消印〕推定 13 / 12 月 / 昭 8 松本伯父に面会<sup>〔異筆〕</sup>

### 〔封書裏書〕

仙台市片平丁四〇番地 大島正隆

### 〔本文〕

一昨日松本さんにお目にかゝりました。<sup>〔光〕</sup>

多分もうおち様から色々お話し下さった事と思ひます。実は僕の方では母上が数日前その旨御通知下さったとかいふお便り、まだ拝受して居ませんでしたのですつかり面喰つてしまひ、折角遠路はるばるお居で下さった貴重な面会時間を十分に活用し得ずに仕舞つた様な憾みがあります。ですが僕のいひたい事は、おち様の事ですから、大体、不十分なお話の中からも酌み取つて下さった事と思ひます。

母上に直接御拝顔したいのが第一目的でもあつたわけですが、考へて見ますと、それは却へつて辛い思ひをおさせする事かも知れません。僕の方でもきつと涙なしにお目にかゝる事は出来なかつたでせう。やはり松本さんに来て頂いたのがお話をお傳へするには一番よかつたかも知れません。無人島の漂流者が経験す』るであらうやうな想ひ、数年ぶりで始めて人の顔を見た様な複雑な気持を感じました。

持参して頂いた金子確かに拝受しました。半分だけは差入屋の方にお預けになつたらしく、昨日から朝夕二度づゝ牛乳が入つて来て居ます。「營養物を讀んで仕舞ふ」との御心配、どうも恐れ入ります。この前の御送金はあれで肝油、罐詰夫等を購入、あとの残りを讀むものゝ方へ積み立てゝおいたやうな事情です。お心を無にしない様にできるだけ充分滋養を取つて行くやうにしませう。重ね重ねの御配慮ほんとうに心から嬉しくお禮申します。

今日は以上の事の御報告だけで筆をとめておきます。以前のお便り、それと松本氏御持参のお手紙、入つて来ました上でもつと詳しく改めて色々書かせて頂きます。 13 / 12

では

隆

## ③ 1933 年 12 月 20 日（封書、便箋 3 枚）Ⅱ -3

### 〔封書表書〕

〔東〕京市目黒區中根町一八三三 大島今子様

〔消印「□□ 8. 12. 前 8-12」〕

〔封書裏書〕

仙台市片平丁四〇番地

大島正隆

<sup>〔異筆〕</sup>  
昭 8 12 / ■ 20

〔本文〕

<sup>〔異筆〕</sup>  
昭和 8 20 / 12 月

七日のおはがきと、松本<sup>〔光〕</sup>伯父御持参のお手紙、拝受しました。済んで仕舞ってから用件のお手紙を頂くなど、随分不便なところです。

お話ししたく思つて居ました事、大体松本さんからおきゝ下さつた事と思ひます。それは要するに、現在の自分がマルクシズムから離れて居る事をハツキリ知つて頂いて御安心願ふ事、それから今まで自分の過誤から測り知れぬ程の御心痛をお与へした事を心の底からお詫びしたいといふそれだけの事に盡きます。この気持、以前、自分の立場を飽くまで正しいものと確信して居た時分にはこれ程苦しいものではなかつたのです。ほんとうにいくらお詫びしても済まぬ事です。僕としては将来、自分の出来る限り、自分の生涯を通じてこの気持を実際』の生活の上に実現して、今までの償ひをさせて頂くより外ない事をしみじみと考へて居ます。

それはさうと、僕は今度、お目にかゝれるであらう事を非常な期待を以つて待つて居たのです。お話しする事より、たゞ母上のお姿に接したいといふ気持の方が先立つたものであつたかも知れません。それだけ伯父さんの代理は僕に失望であつたわけです。遠路お忙しいところをはるばるお居でた松本さんに限りない感謝の気持を持つて居る事は勿論ですがこれは偽りのない僕の心の状態です。色々お居でになれぬ面倒な事情がありますことを思つて残念な事です、母上にお会ひする事はあきらめて居ます。

御送金をありがたう御座居ます。牛乳を松本さんが入れて下さつたのですが丁度一月の廿日頃まで續く勘定です。それと肝油』とで今のところ營養は充分と思ひます。この点御心配ありません。今度随分と餘分な御送金を頂きました故、その一部で又本を買はして頂きます。この前お願いしたもの、近くこちらで購入しますからあれは取消しにして下さい。別なお願いを又申し上げます。足袋カバーを送つて下さいませんか。この頃は足袋をはいて居ながら指にしもやけの出来る冷さになつて来ましたから。そのついでに何でもいゝですから中学の日本史、東洋史、西洋史の教課書一緒に送つて下さい。お引越<sup>〔戸越から中根町〕</sup>しであの古教課書の山が處分されて仕舞つて居ますのなら、このお願いは取消しますけど。誰かの古いのがなければわざわざ揃へて下さる必要はありません。

もうほんとうに一年になりますね。あと十日でお正月だなどちよつと考へられぬ様な気がします。いゝクリスマスと新年をお迎へなさいますやう蔭ながらお祈りして居ます。

それでは、

④ 1933 年 12 月 28 日（封書、便箋 3 枚）Ⅱ -4

〔封書表書〕

<sup>〔東〕</sup>  
□京市目黒區中根町一八三三

大島今子様

〔消印〕



## 〔封書裏書〕

仙台市片平丁四〇番地

大島正隆

〔異筆〕  
昭8 28 / 12

## 〔本文〕

〔異筆〕  
昭8

これは一九三三年の最后のお便りになります。明日からこゝのお役所も休みとなりますからあと當分書けないわけです。

苦しい時の流れも過ぎて仕舞へばすべて夢にも似たあつけなさを感じます。とうとう拘束された生活がまる一年にもなつてしまつた事を思ふと實際夢とでもいひたい様な、自分でもそれを現実に経験して来た事を信じられぬ程の異様な感慨なしに考へる事は出来ません。この一年は僕にとってかつてない悪い運命の歳であつたと同時に又一方非常にいゝ歳でもありました。前言については首肯されるでせうが、この後の方については妙にお考へになるでせう。けれども今の僕は現在自分の境遇を實際さうしたものとして考へて居ます。何よりも第一に僕がこの異様な一年の生活に負ふ所のものは、それを通じて御両親の深』い御愛情に心の底の底から目覚めさせられた事、それから又眞に冷静な客観的な批判の眼をマルクシズム理論に向け得る様になつたのもこの生活なくしては不可能であつた事などを申し上げたら、きつとそのいゝ歳であつた意味を了解して頂けるでせう。この一年の体験をしつかり握つて来る可き年はこの苦い経験の上に立脚して本當に誤りのない眞実の生活を建設しなければならぬことを強く心に感じて居ます。

この一年子としての務めからはるかにかけはなれた行き方をして居た自分の罪こゝに又改めて深く深くお詫びせねばなりません。これが今の僕の心を蔽ふ一番に苦しい感情です。獄舎の生活の物理的な苦しさなどこれに比してはいふべき程のものもありません。この様な子に対して差し伸べて下さつた暖かい御両親の手を思ふ時、実に慚愧に耐えぬものがあります。来る可』き年はきつと生れ改つた正隆となつて何よりも第一に御両親に安心して頂かねばならぬといふその事ばかり考へます。正幸君の帰京、新しい家での最初の新年、本當に僕の事さへなかつたら家中どんなに明るさのみなぎつた昨今でせうのに。

寒さの折ではありますが、こちらはその後異状なく来て居ます。どうか御安心下さいませ様。

いゝ新年を皆々様のために祈ります。

それでは。

十二月廿八日

〔異筆〕  
昭8

正隆

## ⑤ 1936年4月28日（封書、コピー用紙2枚〈もと便箋2枚〉）Ⅱ-5

## 〔封書表書〕

父上様 東北大入学直後

## 〔本文〕

〔異筆 昭和十一年カ〕  
昭和十二年四月東北大入学直後

父上様 四月廿八日 正隆

只今帰宅致して見ますと机上に本らしき小包あり、面倒な願を致しましたのに、早速お取計

ひ頂き先づ以て一杯に有難さを感じました。さて外側からよく見るとどうも本の大きさ、厚さ等僕が古本屋でよく見かけたものや又昨日丸善に参つて居つたものとも異なる様なのでちよつと不思議に思ひましたがさて開けて見ると、これは又思ひも掛けぬ立派な新版のグロツクナー版なのでびつくりして仕舞ひました。ヘーゲルの著作には色々版がありまして、グロツクナー版ラツソン版等その他にも二三種あるのです。此處の丸善で扱つて居りますのはこの中でも一番よくない版のものでしてそんなのを買はされるより東京で多少汚れて居ても安く古本を手に入れて頂けたらと思つて此前の願をしたのですがそれが全く予期しても居なかつた最上等の版の而も新本を買つて下さつたのですから、実に何とも言い様のない嬉しさです。本當に有難う御座居ました。こんな立派なテキストの手前だけでも人一倍勉強してこれをものにしなければならぬと考へて居ます。授業も二週間目に入り、いくらか学生々活にも慣れて来ました。始めの一週間は何しろ四年ぶりなものですから何とも勝手がちがつて落着かずに過ぎて仕舞ひました。一番閉口したのはノートで今迄に経験しなかつた様な速力のものばかりで先生によりちがひますが一回八頁より少いことはなく多い時は十二三頁に及びますのでその時間を四乃至五回繰り返しますと腕が棒の様になつて仕舞ふ有様でした。僕は今特別たくさん講義を聴いてゐるせいもありますが一週間毎にリングノートの紙を卅銭分づゝ買はねばならぬので驚いて居ます。

頂戴して参つた全集は大変重宝して居ります。前、家で読んだものも一度講義を聴いた後で読むと今度は今迄殆んど見過して居つた様な種々の意義を汲み取ることが出来、やはり或一つの専門の学問をやるためには、しつかりした基礎的な訓練を受くる事がどんなに大切なことであるかといふことに気付かされます。今度の様な機会を与へて頂けたことを何度も何度も感謝させて下さい。』

おひるは学校食堂ですがその十二銭也のカレーライスとハヤシライスとは先日各々試みて見ましたが恰も牛の糞をなめてるやうな気がする代物で度膽を抜かれました。毎日メニュー<sup>〔メニュー〕</sup>の代る十五銭の定食を喰べてみますがこの方は少しましです。食堂は二つありまして片方の方は少し高級ですがどうも廿銭代なので敬遠して居ます。然し学生食堂のおかげで菅さんの食事が比較上大変おいしいものに感ぜられて来ました。今のところかくして漸次生活にアダプトしつつありますが、家から通へたらなど時々考へることがあります——上をのぞめば限りなしでしてまあそんなことを思ひ乍ら今から夏に帰る日を楽しみにして居る次第です。菅さんのおもてなしは非常に御親切でして少しも窮屈な思ひをさせずに居て下さいます。雄吉氏<sup>〔菅〕</sup>は夕食后レコード二三枚を聴かせるのを日課の如くにしてくれるので以前と違つて耳の飢饉には会はずに済んで居ます。今日は新に買入れたシヨパンのワルツをかけてくれました。——泰ちゃん<sup>〔弟正泰〕</sup>が前に弾いてゐたものです。

こちらは桜が今満開です。八重もしだれ桜も、それに梅、紅梅、李、梨、黃梅、木蓮等花をつける木々が今一度に咲き揃つて居ますので実に美事です。花を一杯につけた紅梅の梢や桜花の上を鯉のぼりが悠然と■泳いで居るのなど、當地でなければ見られぬ風景でせう。お見せしたい程です。

暇がないのでいつも大急ぎで手紙を書いて居ます。乱筆乱文お許し下さい。      それでは又祖父上、御両親その他皆の人達の上に

あつき上よりの御護りあらんことを日々祈つて居ます

⑥ 1937 年 1 月 16 日 (官製葉書) II -6

〔葉書表書〕

東京市目黒区中根町一八三三 大島正泰様

昭 12 1 月 16 日

〔消印「未納不足は先の迷惑 福島 12 1・16 后 4-8」〕

〔本文〕

二本松で出しそびれて福島で投函

吾妻の一斉はパウダーケーキの純白さ、もう仙台まで二時間の所に来た。

こんなに山の美しい日は度々の往復中初めてです。丁度安達太良の眞横を走つて居る。高台ヶ原附近より上は眞白、その中から例の頂上が黒く乳首の様に突出して居ます。一月の半ばといふに稀らしく今年は雪のない平地、然し流石に北へ来たゞけのことはある。田には厚い氷が張り、山かげの崖からは太いつらゝが幾條も、そして学校帰りのモンペの子達が毛絲頭巾の中に紅い頬と好奇の眼の輝きだけをのぞかせて汽車を見てゐるのも寒い点景です。

今朝は荷物持の御見送り、ありがとう。では又

⑦ 1938 年 8 月 1 日 (絵葉書) II -7

〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八三三 大島正明様

オキで 1 / 8 隆 <sup>〔異筆〕</sup> 昭 13

〔消印「西郷 13 8・1 后 0-4」〕

「島送り」第四日目——今一番食べたいもの、野菜と菓物。

肉の締つた鯛の刺身と実に軟かくあまみのあるシヨツパー、サゞエ、アワビなど三度々々お目にかゝる。一昨日松浦さんといふ島の有力者の所での御飯はジャガイモの茹でたのと豆の煮付だつたが実においしかつた。そろそろシヨツパーを見るのがいやになつて来た様です。今朝の船は大時化、甲板に波が打ちあげゴロゴロ器物が轉がる有様、小間物屋開店の直前も西郷湾入港で救はる。正明先生よく船乗など志願するものだ后感心——それで思ひ出したのはそちらの試験のこと。しつかりやれよ。

〔葉書裏〕

〔写真「隠岐名所・西郷公園ト西郷港埠頭ノ隠岐丸 (隠岐物産陳列所発行)」〕

五百トンの船。中央デッキはわが横臥し来れる二等船室なり。

⑧ 1938 年 9 月 19 日 (官製葉書) II -8

〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八三三 <sup>〔異筆〕</sup> 1833 大島正明様

<sup>〔異筆〕</sup> 昭 13 19 / 9 仙台 隆

〔消印「仙臺 13 9・19 后 0-4」〕

## 〔葉書裏〕

御見送、重いものを持つてもらってありがとう。汽車は悠々間にあつた。だが深夜、丁度府立高等駅で見たと同じ様な奴がビール罎をふりまわして鉄道員を、フ騒ぎなどあり、つくづく戦時下人心の陰しさに呆れたり嘆かせられたりでオチオチ寝られず。菅家で二時間ばかり寝て只今登校したところです。仙台は完全に秋だ。そちらよりずっと冷々して居ます。明日盛岡へ。皆々様にどうかよろしく。

## ⑨ 1938 年 10 月 19 日（絵葉書）Ⅱ -9

## 〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八三三 大島寛君  
隆 <sup>〔異筆〕</sup> 昭 13

〔消印「十和田湖 青森 13 10・19 后 0-4」〕

2. アオモリトバマツ、白樺、熊笹 これが初雪に染められて居る地帯。その下はたゞ一面の山毛櫸の原生林、この林のうら枯れた褐色が透きとほる様な秋の陽を浴びて淋しくも華やかな錦をつぶる。よく見ればこの中にも上の地帯の樹が疎らにまぢつて居た。

〔スタンプ「青森縣十和田山峰猿倉温泉 13・10・15」〕

（実は八甲田の一峯）

## 〔葉書裏〕

〔写真「雪の猿倉より高田大岳を望む 国立公園十和田 猿倉温泉」〕

## ⑩ 1938 年 10 月 19 日（絵葉書）Ⅱ -10

## 〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八三三 大島寛君  
猿倉一十和田 隆 <sup>〔異筆〕</sup> 昭 13

〔消印「十和田湖 青森 13 10・19 后 0-4」〕

3. その下へ来ると山毛櫸の下生えに漸くイタヤカヘデが顔を出す。然し所謂「紅葉」を代表するツタヤカヘデの眞紅はあまり多くはない——奥入良瀬まで降りても。褐、茶、黄、橙、それに不思議にも冴えざえと残る緑、その濃淡とりどりの盛り上にまぢればこそモミヂの色も引きたつのです。表現しきれぬ色彩感、つくづく見せたいと思ふ。十和田の白砂に腰下して一筆。

〔スタンプ「青森縣十和田山峰猿倉温泉 13・10・15」〕

## 〔葉書裏〕

〔写真「猿倉道の放牧場 国立公園十和田 猿倉温泉」〕

## ⑪ 1938 年 10 月 20 日（絵葉書）Ⅱ -11

## 〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八三三 大島正泰君  
隆 <sup>〔異筆〕</sup> 昭 13

〔消印（風景印）「平泉 13・10・20」〕

とうとう北海道まで行きました。函館の遺愛女学校で石原さんの講義は行れたのですが此處はかの有名な「若い人」の女学校、僕はそこの国語文の間山さんといふ若い先生（卅四五）にどういふ譯かえらく気に入られ、帰る時など手が痛くて閉<sup>〔口力〕</sup>する程の握手をされたりなどしました。あなたが□崎先生ですかとぶしつけに聞く心臓男など□□□□面白かつた。＼休みつゞきなので十和田は美□□□□のしづけさにふさはしからぬ人々で□□ばか□□□□□□ひの騒ぎ蔦温泉など何百人□□□□□□□□□□泊った猿倉はあまり知られぬと□□□□□□□□□□足らず山ブドーの漬物やアカ□□□□□□□□□□たいな顔した気のいゝ番頭と友□□□□□□□□□□

〔葉書裏〕

を連れてくる約束などしました。スキーにも素晴らしいところ、宿は奇麗でお湯も豊富な硫黄泉で■す。盛岡で一泊。

〔写真「盛岡の風光 松屋百貨店よりの展望」〕

## ⑫ 1940年6月5日（絵葉書）Ⅱ-12

〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八三三 大島正泰様

六日 隆

〔消印「□□□□間 15 6・5 酒青」〕

八郎潟の景色は朝・昼・夜と三度見た。（大館で三日過し、また秋田へ南下、再び北上して今は津軽の野づらを数時間後に眺めんとして居る。）町の宿屋にはもう飽き飽き一昨夜は相馬大作で有名な矢立峠山中に泊った。老杉の谷間、昼には鷹の鋭い啼声を夜は窓下に夜鷹の寂びた聲を聴し、花瓶には鈴蘭が盛られ幌馬車に操られた峠道にはツゝヂや此辺でガンジヤと云ふ亡き色の花總が美しく加った。

桜桃はもう出たらしい。但し今月末迄駄目だよ！おそろしくはりつめた毎日を歩いて居る。おちおち寝るひまもありはしない。

〔葉書裏〕

〔写真「（秋田縣十和田湖）鎧嶋と兜嶋」〕

## ⑬ 1940年6月22日（絵葉書）Ⅱ-13

〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八三三 大島正泰様

山形で 隆 <sup>〔異筆〕</sup> 昭 15

〔消印「貯蓄報国 山形 15 6・22 后8-12」〕

今日は学校の創立<sup>〔創立記念日〕</sup>で休み。奥羽山脈をぬけて山形へ来た。そして一日図書館で古文書をひねくる。然し合間々々に眼をあげると正面の窓一杯に雪に輝く月山の構図が浮んで居た。終列車で帰仙、その合間に駅で一筆。約束のもの心ばかりを送る。寛ちやんの口にも入るやうに。

## 〔葉書裏〕

〔写真「山形の郷土色 さくらんぼ 山形郷土人形」〕

## ⑭ 1940 年 10 月 23 日（官製葉書）Ⅱ -14

## 〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八三三 大島正泰様

〔異筆〕 10 月 廿三日 〔異筆〕 昭 15

〔消印「國債の力で築け新東亜 仙臺 15 10・23 后 0-4」〕

## 〔葉書裏〕

御手数ながら十一月中の新響番組、雄吉氏宛御一報下さりませんか。それを考慮して二三日上京の由ですから。

小生此の秋休みは古文書展の骨休にまたヒユツテぐらし。昨日秋霜の山ぶところを後にして来たばかりです。多分数日中に庄内秋田方面へ出張の豫定。

オリムピアを見たが感心したのはギリシヤの部だけ、あとは素晴らしい技術ではあるけれどもどすぎるのが気になった。（さかさになって御免） 隆

## ⑮ 1941 年 8 月 25 日（官製葉書）Ⅱ -15

## 〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八三三 大島正泰様

廿五日 仙台 〔異筆〕 昭和 16 年

〔消印「仙臺 16 8・25 后 4-8」〕

## 〔葉書裏〕

寝耳に水の電報と一緒に珍客到来、その御仁は今日の午前中、夜行の疲れを悠々ワシの研究室でヒル寝しました。明日より三日の豫定で小旅行に出ます。 隆

〔以下異筆〕  
出る時は一騒をしましたが、一晩で来てしまふと何だかあつけ無いです。皆が家に残つてゐるのに一人飛び出して心残りがします。金華山の方でも二日位いつて二十八日頃帰らんと思ひます。今、兄さんにゴツツォーになつてゐる所です。仲々うまかつたです。お母さんによろしく。  
では又。 〔異筆〕 正明筆跡也

## ⑯ 1941 年 9 月 12 日（官製葉書）Ⅱ -16

## 〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八三三 大島正泰様

九月十二日 於学校 〔異筆〕 昭和 16 年

〔消印「仙臺 16 9・12 后 4-8」〕

## 〔葉書裏〕

此のはがきが着く頃「第二次考査」が発表されるらしい。君は今度も落第かしら。無事パスを祈るが、そうでない場合とて、ウロウロせんで男らしく行動して下さい。

こちらでも十二月卒業なので勉強も忙しいし、その中で隣室をまた他所の奴に借りられるなど、

随分あはたゞし■くゴタゴタして居ます。何はともあれ、僕には勉強第一。前線と同じ気持でやつて行きたいものです。(どこにあつてもお互ひに)。

先日健ちやんに小包送りました。こちらの「旧知」はあれだけです、とお傳へ下さい。 隆

⑰ 1941 年 10 月 8 日 (絵葉書) Ⅱ -17

〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八三三

大島正泰様

仙台市北三番丁十六

大島正隆

〔異筆〕  
昭 16

〔消印「仙臺 16 10・8 前 8-12」〕

去年の十一月二日は鶴岡に居ました。鳥海の山頂は三分通りの新雪を晴れた空に輝かせ、刈入の済んだばかりの平地は小春日和のおほらかさ、庄内米の新米のうまさにタンノーしつゝ酒田鶴岡間を往復した事を想出します。あの時はオーバーもなしの私服姿だつたが今年は少々寒いかも知れない。いつも初々しい霜柱の見られる頃で、北國の紅葉の最後の輝やきを一瞥■する事が出来ます。こちらは機業地でないからどうかと思ふけどズンメンもあそこいらならあるかもしれん。作並<sup>〔距離〕</sup>は山形を六時に出れば七時半に着く。仙台からも同巨<sup>〔距離〕</sup>、朝十時前に仕事がないなら泊つてもいゝでせう。(お茶を呑むところは仙台まで来ないとなひよ)あの近所には高湯、上ノ山等<sup>〔距離〕</sup>は沢山あります。楯岡は降りた事なきもほんとうの小さい田舎町だらうと思ひます。こゝは大石田から東の山奥に入ると銀山<sup>〔距離〕</sup>といふ山の湯がある。さて鶴岡まで行つてしまふと帰りはどうしても羽越線<sup>アツミ</sup>でせう。鶴岡から五十分南下すると温海といふ<sup>〔距離〕</sup>あり。こはかの金山画伯の「高價なるもの」の地だから是非一泊してはどう。何だか温泉協会の案内みたいなことになつてしまつた。僕は一日山形で拝聴するつもり。豫定がたつたら知らせて下さい。放送が一番いゝラヂオのある家へ行つて聴く。 不一

〔葉書裏〕

〔写真「日月圖屏風 帝室博物館蔵」〕

⑱ 1941 年秋 (封書、原稿用紙 5 枚〈表裏 9 頁〉) Ⅱ -18

〔封書表書〕

東京市目黒区中根町一八三三

大島正泰様

〔異筆〕  
昭 16 (母の急変に際し家族への激励)

〔消印「□□□□ 后 4- □」〕

〔封書裏書〕

東北帝大、法文学部 國史研究室 大島正隆

〔本文〕

その後皆さん如何、だれもだれも皆それぞれの度に應じて身に負ひ擔つて居る家の心配や苦勞の大いさを思ひ、その下に凜々しく生きて居るみんなの姿を想ひながら、今は北方はるかかの地で再開された自分の職場の人となつて居ます。毎日十度台で麻服などは着られない。四十雀やヒガラ、コガラなど秋の小鳥の群が町中に可愛いゝ囀りを漂はせて居ますが、この気温のおか

げで今年は例の長ナスも影を見せない。野菜類は不作のために漸次品薄の様です。女中はあちこち當つて見たがまだてんで見込が立たない。今、仙台で新規に頼むには十五—廿円位出してそれも数ヶ月がかりで辛うじて見付かるかどうかといふ程度、(旧くからの関係をそのまゝの家ではそれ以下の給金だけれど)こちら■も中々容易ではない事を知りました。といふとこんなに困難だが、或ひは「東京へ」といふのに憧れて應じるのがあるかもしれないと古田さんなども言はれるけれど、ほんとうに「かもしれん」の程度、■またそういふのは官費上京してすぐドロンを決めこむ連中です。とに角今日まで三日のところでは全く目途なくただただ困惑するばかりです。——これは「家に病人」などいふ条件全然ぬきでの話ですから、どう仕様もないのです。たゞ根気よくあちこち出会う人毎に頼みまわつては居ますが。」

今日は滞京中に心付いた色々な事、またこちらで大学の同輩達中の殆んど全部が自分の身内に脳溢血の人を持ちまた持った人達(中には高校二年の時以来今日迄入れ替り立ち替りの家内脳溢患者にずっと付添ひ、現に七月末再発のお父さんを看てるなどいふのも居る)だつたのでその連中から随分適切なアドバイスをもらつたりもして居る。そんな事を、織込んで手紙を書きませう。』

1、第一回の発病は必ずよくなります。その事について心配せぬ様に、たゞ時■と忍耐の問題です。

2、御病人にも周囲の君達にも一番大切なのは心の平静です。例へば先日来のお母さんの様に「眠られぬ眠られぬ」とて、或ひは又「恢復するだらうか」とてしきりに焦慮される。焦慮される結果として神経状態はおそろしく亢進し、気持の亢奮は直ちに血圧に響き、ますます眠れもしなければ、恢復を妨げる事ともなる。一回の亢奮は数時間の睡眠の結果を台無しにするといひます。ですから何よりも第一にお母さんのかうした気持が鎮まらねばならない。すべての心配を神の大きな手にうち任かせて「空の鳥 野の百合…」の心境に立たねければ今後のお母さんはどうにもならない。先日来おそばへ行く度に「神様はどういふ思し召しなのだらう」とか、「寛と一緒に聖書を読み、祈りした時の楽しさ、あんなことはもうこれからはないだらう」とか、日曜健夫と一緒に居た時みたいに「家で集りをしてるのなら、その隣へ搬んでおくれ、着物をきかへてそばで私も静かに聴かしてもらふから」などおつしやつたりする。このお母さんのひそかなる要求にみんなは總がかりで応へ出来なければいけない。それにはみんなの一人々々の心が、戦場の騒ぎの中になほこうした平安に充たされて居るのでなければ、どうしてかうした任務を果す事が出来よう。決して御病人の気持と一緒に憂慮し、苦悩し、神経を使ひ、などしてはいけない。君達はどんな時で■も、希望に充ちた笑顔を以つてお母さんに接し、その平静をお助けするために静かな心を注ぎ出してあげなければならない。何よりも第一に大』島家がほんとうの「クリスチャンホーム」となる事、それ以外にお母さんをかうして内面からお支えする途はないでせう。お祖父さんを送り、苑子が去り、寛を失ひ、今の家の状態は外には大きく厳めしく見えるけれど精神的な意味ではまるであばら家同然です。だが■そんなに多くの柱を失つただけけれど、こんどは■僕達自身が支柱にな■れればいいのです。そしてほんとうの土台の上に、外觀や見栄などはどうでもよい、小ぢんまりと纏り且つ落ち着いた僕達相應の家を建て直ませう。■■粗末な板囲ひの家だつたとしても、お互いやさしい愛情の■蔭かつらを這はせて、その醜くさを掩ひあいませう。



3、その為にも外からの刺戟は出来るだけ防がれ且つ減少さるべく務められねばならないでせう。現在は勿論、一應恢されてからのお母さんにも、頭を働かせる余計な刺戟は決してお傳へしてはいけない。■■■これまでと同じやうな生活をおさせしたりするならば、それはたゞ迅速な再発への大道である事、火を見るより瞭らかです。どうしたらよいか、お父さんもこれには御心配の事でせう。みんなもどうか、よくその辺をのみこんでお■■■助けしてあげて下さい。よい家政婦人・穏健な女中、そんなコンビを考へて見るが、それも家の人が小さな事とや角いはずに任せ切れるかどうか、■■■■その点を乗り越えなければならず、第一、最初に書いた様に、そんな人を探すあてさへもない現在です。だがいよいよ必要となつた時には此処にもきつと思はぬ途が備へられませう。此処でもクヨクヨ先走つた心配などせぬ様に、たゞどうしたら家の事情にお母さんの』病気の為に、最善であるかを、祈り求めつゝ考へて居て下さい。

それよりも現在家の中に横たはつて居るあらずもがなの余計事をみんなの気がつき次第ドンドン改めて一掃して行く事の方が手近でせう。それについては君達の方がきつと百も千もよく気がついて居る事と思ひます。ドンドンお父さんに建言し且つ御相談する事です。フアーターは例の御気性だから瞬間的には理不盡なムカツ腹を立てられたり、妙な理由を固執されたりする事はあるけれど、雷雨一過の後の晴天ぶりはまた他家のおやちに比類を見ないものがある。すぐれた御方だから理に叶つた事は早晚必ず採つて実行して下さる事を銘記して欲しい。みんなは暗雲の不愉快さばかりを随分気にするけれどそんな事はどうしてもよい事、どうかあの晴天ぶりばかりが眼につく様になつて欲しい。——ついでだけれど。

僕は気付いたその中のたゞ一つだけを此処に言つておきたい。それは家は余りに外部との交渉が多過ぎるといふことです。今度は「葬ひやら何やかで」と答へられるかも知れぬけど決してさうではないのです。——お客が多過ぎる、といふ事は。普通、学者の家庭は実業家だの有閑貴族だのとは違つて社交や親類づきあひなどに時間を潰す義理は少しもないのです。一週たゞ一度の面会日の他はあらゆる対外交渉を断はる我儘さへ、堂々と公認されて居る。それ程にみんな時間を惜み余計な勞力を惜みます。家は普通家庭に比し訪問客が少いことこそ常態であつてよいのではなからうか。』早い話がふだん僕達が親類のおちさん達の家へ遊びに行つてよその人にかち合ふ、などいふ事は殆んどない。然るにたまたま恭をばが家へいらしての間だけで毎回二組前後のお客にかちあわれぬ事は珍らしい。そして谷の船長はあの通り閑であり、お父さんはあんなに迄忙しく時間を必要とされる方ではないか。これでよいのだらうか。精力的なフアーターはそれでも済まれるかも知れない。然しお母さんが潰されたその直接原因は実にこの「お客さん」ではなかつたか。僕にはあのお留守中相次ぐお客の長談義にクタクタになつて援けを求めに来られたお母さんの姿、そのくせ上つてもらひたくもないお客に「まあどうぞお上りになつて」など無理々々手を取らんばかりにされてた。あの痛々しい努力のたまらない印象が一杯に眼の前に広がる。そしてまた御両親共、客を愛される方でもあるからそんなに多い訪問者の一人々々をまた出来るだけ長く引留めやうとなさる。これではますます耐らない。殊にお父さんは普通の人より話術に長じ、広く豊富な話の種を持たれ、且つ話して聴かせる事を好まれる。訪問者が面白がつて座りこんで仕舞ふのは當然であつて、家では三十分以内のお客など殆んどない有様ではないか。こんな事でどうならう。みんなはあらゆる機会をとらへ出来るだけの努力をもつてそれとなく御注意申上げてくれませんか。お父様も今は丁度識見に

於て経験の数々に於て、まさに学的生涯の頂上においでなのであつて、その数年のまたとない時間をそんな事の為にお使はせしていゝものだらうか。アカデミーを離れて孤軍奮闘して居られる■■■■お父様であるだけにますますそんな余計な浪費を防いであげなければいけない。これは僕達みんなの責任だし、そしてそれは同時にお母さんの為にか家の繁忙ゴタゴタを簡潔化する大きな一歩でもある。あの優秀な学者のフーターをお客の相手なんかにはさせたくない。またコマコマ台所の采配までおん大が押はねばならぬなどいふ馬鹿な事はない。みんな出来る事なら協力してお父さんはそんな小さな事をすべて放り出されて学問の■■大事、信仰の大事だけに眼を向けられるやうお仕向けすることだ。そして出来ることなら南洋であらうと世界の何処であらうと、よいフィールドを見付けられる度に、お母さんの事を始め家のすべてを任せて飛び出して行かれる様なしつかりした留守部隊になつて欲しい。(お父さんは何でも御自分でなさねばお気が済まず、従つてまたみんなは何も任されないから、何もせずにポカンとして居るだけの話である。最初はドチを踏んだり間違つてたりするにきまつて居■■■でも、それを我慢して一任しきつてさへ下されば次第にその中から練達生まれるのだが)。——これは今すぐにはまだ無理だらう。だが少なくとも■■■息子のゼネレーションの親類のお客などには息子が出て應待すればいゝ。おやぢは權威を以つて、たゞちよつと五分も顔を出して見せればいゝ。台所などは今だつて出ずに済む。どうかそうして少しでも貴重な時間を貴重に使つて下さる様みなでおたすけし配慮して差上げなければいけない。お母さんの事以来僕にはそんな感じが頻りだ。世界の水準にとゞき得る学者を愚にもつかぬ学校のゴタゴタで腐せたり、小さい一家庭の煩鎖（ママ）な日常時に疲らせたりしたくない。今日迄僕達はみんなそんなに迄貴重な力を割いて育てゝ来て頂いた。こゝまで大きくなつて来たこれからこそ、今度はほんとうにお父さんをそのあるべき本當のフィールドに押し上げて差上げる様に段々ならねば嘘だ。今度のこの事はその第一歩と思つて欲しいのです。いつか僕が東京へ帰らう。中学教師になつても、と決心した時にはこれだけのつもりはとに角持つて居た。自分などがちつぽけな学者のはしくれになるよりも、とどれだけ考へた事か知れません。』残念ながら今の僕はこんな気持ちだけで、一向無力なでくの坊だけれど、それだつていつまでもこのまゝである訳はなからうと言ふものです。目前、研究室生活の義務を眞実こめた努力も一つ一つ片附けて行く、そんな迂遠に見えるところから、案外お役に立ち得る境地も拓かれるのでせう。（正泰）（正明）泰ちやん明ちやん始め皆もそれぞれこんなのに似た様な気持ちで自分に能力と機会の備へられる日を待つて居る事なのだらうと僕は思つて居ます。書いてるうちに本筋からはいさゝか離れて仕舞つて御免、それはとも角當面のお客さん問題だけは是非今度を機会に改革しなければ駄目です。一番の困難はお父様がそれを楽しみにして居られるかの如き点にあるでせう。だがお好きなまゝにおさせ申してよいものかどうか、賢明に判断して下さい。一日数回のお茶の出し入れが助かるだけでも家の台所事務の方だつて■■余程気楽なものになるに違ひないです。とに角大島家程客出入の多くて長い家は、僕の見聞内には類例を知りません。家にずっと居るとそれが當り前の様に感じるかも知れない。だが外から帰つて見るとその異常ぶりがいつも眼につく。——思ひきりクドクド此処まで述べたてゝ君達の注意を喚起する所以です。台所まで来て下さる様なお客はいくら長居してらしても構はない。だが入学を頼みに来たりなんかする種類は玄関で済ます。本屋や原稿取りなどは向ふの用件だけきゝとつて卅分以内に切上げられる。悠然放談する■■■■

では又

## ⑩ 1941 年 12 月 4 日（官製葉書）Ⅱ -19

## 〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八三三番地 大島正泰様

仙台市北三番丁十六 大島正隆

4 / 12 <sup>〔異筆〕</sup> 昭 16

〔消印「貯めよう！ 勝たう！ 仙臺 16 12・4 后 0-4」〕

## 〔葉書裏〕

ヒヨンな事でお目にかゝれずに仕舞つてからもう一ヶ月経つ。早いもんだ。福島へは先月中旬バブリツクの用事で一日行つて来た。吾妻の銀嶺が立ちはだかつて、如何にも冬を感じ。遠く安達太良も見る事が出来た。仙台ももう降雪二回、零下三度なんかになる朝もあつて、少々つらい。

お母様その後の御様子如何。こちらの学校は今週ズット「検査」ばかり。卒業生の殆んど全部が合格して居ます。また。

## ⑪ 不明（封書、原稿用紙 1 枚）Ⅱ -20

## 〔封書表書〕

東京市目黒区中根町一八三三 大島正泰様

仙台 隆

〔消印「<sup>〔仙〕</sup>□臺 □□」〕

## 〔本文〕

今週末ちよつと帰京のつもりであります。—（これは中止・6 日）

祈つて居る。 では又。 アシが不自由になつたから

正泰様 四日午前三時（もう寝るよ） 隆

おたよりありがとう。

僕も学校へ出ないで終日ピアノならぬ原稿用紙に向つて居る昨今、まさに相通ずるものがあるやうです。

初ステージどうかしつかりやつて下さい。立派な成果を信じて居ます。心配無用のことです。但し一切聴衆を念頭におかぬこと。自分を實際の力よりもつとよく表現しその様に人から聴いてもらほふなどいふ考へは毛頭あるべからず。

人を見ずにピアノだけを見て、自分の眞實あるがまゝを、それから考へた通りの眞實をシューマンに表現するまでせう。一切の掛値なしに然しまた割引もなしにあるがまゝをさらけ出すのだと考へて下さい。自信を持つてやることです。

然しいくら自信を持つても自分以上にはならないしいくら自信を失つても自分以下にはならない。すべてを大きな手に委ねて自分は安心しておいでなさい。——大丈夫だから。

## ⑫ 1942 年 2 月 16 日（官製葉書）Ⅱ -21

## 〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八〇番地 大嶋正泰様

千葉縣勝浦町新官 押塚方 大嶋正隆

16 / II

<sup>〔異筆〕</sup>  
昭 17

〔消印「千葉勝浦 17 2・16 后 0-4」〕

〔葉書裏〕

詳しいおたよりを有難う。色々そちらの御様子なつかしく拝讀しました。フアーターの御意気込を想ふてはこちらも大いに嬉しくなる。何といつても昨今、一番大がゝりな仕事の出来るところだからね。没暁漢の仕様のないのも随分居るところでもあるけど。こちとら也大いに気宇を壮大に持つて、このところ毎日、欧州航路の客船に乗つて居り、ドイツくんだりへ出かけとる夢など見て居ます。——海側の窓さへ見てれば、終日水平線と波だけ、而もちつとも揺れんのだからまさに豪華船さ。一昨日鯖を喰つたら何だか夜中に手足に発疹ができこんな筈はなかったがと首をひねる。ところが昨夜もさ、そして何だか妙にムヅカユイ発疹。漸くそこで気がついて毛布を検査するとズネーのが一匹健在。何のこつたい。こんな奴が出て来るんぢやいよいよ春も近いなゝど想つとると赤馬もちよつと可愛くなる。(■■人類の福シの為■火刑に處す)だがまだしばらくは寒さが続きさう。蠅タゝキの要らぬ日■■■ばかりで一向外へも出られんで居ます。先日の小包、面倒くさいことを色々御配慮ありがとう。

② 1942 年 3 月 14 日 (官製葉書) II -22

〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八〇番地 大嶋正泰様

千葉勝浦新官 押塚 大嶋正隆

14 / III

<sup>〔異筆〕</sup>  
昭和 17 年

〔消印「千葉勝浦 17 3・14 后 0-4」〕

〔葉書裏〕

昨日は久しぶりで玉聲に接す。あれからブラブラ歩きながら帰つて見ると机上に今度は玉章あり。えらく豪勢にあちこち飛ぶ御身分に感心、またお出でなきは処何と案じてたことも解消しました。

小生は十七日に帰ることゝします。だれか来れば果物ぐらひお母さんに持つて帰れるのだが、或はまた海模様によつてはイナダなんかゝ新官にあがることもある。タコはいつでもある——但しわしは押塚のオカミサンに見るのも嫌だと断つてある。(二月中は全部平らげて居たのに)——とに角例によつて荷物は持たん事にします。若し豫定外のものが出来たら電報するから、だれか両國迄来て下さい。雄吉氏雪国旅行の名句来る。「北国の月見付けたる氷柱かな」だと。

③ 1942 年 5 月 13 日 (封緘葉書) II -23

〔表〕

東京市目黒区中根町一八〇 大嶋正泰様

<sup>〔異筆〕</sup>  
昭 17 5 月 13 日

〔消印「<sup>〔仙〕</sup>□臺 17. □. □」「速達」〕

〔裏〕

13 / 5

仙台市片平丁 東北帝大國史研究室

大嶋正隆

〔本文〕

大藏大臣宛の用件

次の月給日まで持ちきれん、あと秋保往復の電車賃とメシ代五日分を剥すのみとなつた。「大至急乞救援」

今度から一つ頑張つてと思つたがやつぱりこの次からでないと駄目さ。

前の土・日には石原さん<sup>〔謙〕</sup>を圍んで東京仙台の弟子共六名、勿来関を越えた茨城縣関本に落合ひ、大津海岸に一泊して来ました。仙台からは四時間もかゝる。却つてそちらの方が近いやうです。あの辺一帯、つまり駅でいふと磯原一関本一勿来間の海岸は常磐沿線中一番の好景地でせう。豪勢な宿などはなくて都人士には不便かも知れんが一度降りて見てもいい所です。岡倉天心の様な人が住ひし、お墓も此処にあるところから推してもつまらん所でないことは察せられるでせう。日曜の朝先生のお話を久しぶりで聴き、(小生司会)それから「道もせに散る山桜花」の関所の海岸を二時間ばかり歩きました。ダルマさんになつて仕舞つた一因はかうした思ひがけぬ遠出などあつたことにもよるが、恩師を中心に好景の天地に、気心知りぬいた連中と一緒に過した二日間はちよつと他の何物によつても購ひ得ぬ恩恵でした。

秋保は今月末に打ち切りとします。大学の研究にも熱と気力を更新しとるし、学院の講義も面白い。——これで何の顧慮なくからだを駆使できたらなど思ふけど、無理がきかず、すべてを神の御手まかせに歩まざるを得ぬ現在こそ却つて倍增の恵みでもあらう。ではまた書く。「用件」は御父様によりしく御願申して御處置下さい。先日は母上のハガキを頂き大いに嬉しく、時々出してはまた眺めて居る。

②④ 1942 年 9 月 3 日 (封緘葉書) II -24

〔表〕

東京市目黒区中根町一八〇

大嶋正泰様

<sup>〔異筆〕</sup>

昭 17 年 一度新官より帰仙の時

〔消印「仙臺 17 9・3 前 8-12」「速達」〕

〔裏〕

仙台市北三番丁一六

大嶋正隆

〔消印「目黒 17 9・4 后 0-□」〕

〔本文〕

昨日久しぶりで東北学院へ行つてみたところ八月休暇中の月給はもらへぬ事判明大慌てなり。何とも仕方がないのでまたも大藏大臣に求援状を書く次第となる。父上にお願して卅円ばかり頂ければと思ふ。私立学校は大学みたいにノンビリしとらんね。

右大至急お頼み也。

當地は昨今絶好の秋晴が續き毎朝澄んだ大氣を通して藏王の山肌を美しく眺めて居る。果物

はブドーが出盛り、黒いの青いのそれから粒の細かい赤いやつ、毎日舎生のだれかゞかつぎこんで来る。

僕の親しい先輩で大学の講師と二高教授を兼ねてる人が居る。此人すばらしい頭の人ではあるが惜しいかな健康に恵まれず、此春やゝおそ目の家庭生活に入られたばかりで今学期はしばらくまた休まねばならぬといふ。その間二高をなどいふお話がちよつと出たけど、小生とて学院の経験では大学と両方ではちよつと健康に自信がない。臨時講師は他の人をお願いしてしまった。そんな事などあつてつくづく考へた。俺はどうも大学の先生などにはなりたくないしなれもせんだらうが、ボン、タケ先生達位の人達相手の仕事だときつと一生そこへ落着いて仕舞ふのではないかなど、それはとも角、早く心配ないからだになつての話だけれどね。 　　で  
は又。

㊤ 1943 年 4 月 6 日 (官製葉書) II -25

〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八〇 大嶋正泰様

仙台市北三番十六 大嶋正隆

〔異筆〕  
昭 18

〔消印「仙臺 18 4・6」〕

〔葉書裏〕

父上はいつ南方へお出かけなのかしら。小生も月末にはチョコレートを喰べに行く筈。御依頼のメトロノーム、仙台中を探したけれど、すでに手遅れでした。何処へ行つても、「とつくに無いのが當り前」、と云ふ様な顔してるには驚ろいた。製造禁止だなんて本當かしら。それでは音楽家も大変だね。＼そろそろ春休も終つて、帰京してた舎の人達も戻つて来始めた。丸ノ内でボン君に会つたゞの咲き初めの花を見て来た話だの、聴くと東京もなつかしい感じがする。こちらは梅が開き始めた。風はまだ冷いが、もうかうなれば占めたもの、「雪國の春」の感じは御存じの通りです。＼訓示は近く致します。但し本當を云ふと、いくら本讀んでもまだ足りないのだよ。(学道の宿命)

㊦ 1943 年 5 月 12 日 (絵葉書) II -26

〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八〇 大嶋今子様

京城旭町不知火旅館 大嶋正隆

12/V夜

〔消印「京城中央 5・13」〕

お送りしました絵ハガキは普通では手に入らぬ。當局特別好意の贈られものです。実物おしのびのよすがともなればと思ひます。王宮の中は今牡丹で埋まつてゐるみたい。こちら初夏に入つて少々冬服は苦しいですが追々丁度よい世界に追付いて行きます。朝鮮のものはすべて昔に遡る程よく、時代の下る程俗悪です。而も鮮人の觀覽者を見て居りますと自分の過去の美に對して一片の興趣さへ持たぬようです。(何トモ氣ノ毒ナ話)

## 〔葉書裏〕

〔写真「(京城) 京城四大デパートの一、丁子屋の景観」〕

## ②⑦ 1943 年 5 月 12 日 (絵葉書) II -27

## 〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八〇 大嶋正泰様

京城旭町不知火旅館 大嶋正隆

12 / V

〔消印「京城中央 5・12」〕

京城は凄く活気のある、仙台より三倍ぐらひ店の多い町だ。——何でもある。だかなるべく廿年前の記憶にある店ののれんをくぐると大抵間違なく、今はその昔、香をかぎながら前を通つた家へ上つて、すばらしくうまい鰻定食に疲れを醫したところです。

博物館は李王家のも總督府のも何ともいへん素晴らしさ。これだけのためにわざわざ来てもよいのである。有難い旅に出して頂いたもの、たゞたゞ感謝の他なし。楽浪の遺物と三國の古佛と高麗の陶磁器と、これからいつも夢に見るだらう。

## 〔葉書裏〕

〔写真「(京城) 究理の學府經學院 文廟神門の景観」〕

## ②⑧ 1943 年 5 月 17 日 (満洲国官製葉書) II -28

## 〔葉書表〕

東京市目黒区中根町一八〇 大嶋正泰様

奉天市ホービルホテル 大嶋正隆

17 / V

〔消印なし〕

## 〔葉書裏〕

大陸へ来たゞけにちよつと旅順まで往復して来より、などいふ。内地だつたら相當の大旅行を気軽に出て来てしまふ。その途上奉天に立寄り、博物館とクリスチーの大学を見ました。全満一の人口都市、こゝは満人が壓倒的に多いらしい。電車の押しあひ、駅のワイワイ、体臭、全くかなはんものがある。今日は石井漢が来とつて四円の入場料をとつて居る。映画館には「華かなる幻想」といふのがかゝつて居る。(新京でもやつて居た。) お菓子は四月から配給でロシヤ店は数軒あつてもお茶ばかりだ。だがそこでかけてるレコードは始めておめにかゝる代物ばかりで仲々いい。ガサツな植民地的日本人客ばかりで気の毒みたいです。おすし一つ四十五銭、奉ビルでタメシを喰べたら五円二十銭、床屋八〇銭、市電二十銭也。新京なら住んでもいいゝがこゝはいやだ。自由販売なので夜の町はよつぱらひばかり。恐ろしいもんだ。

## ②⑨ 1943 年 8 月 7 日 (『歌集 上総の海 大島正隆遺稿』所載、もと原稿用紙 1 枚) I -18-2

## 〔本文〕

来年のことはまだしばらく決めません。小生にとっては基督教の信仰を一生静かに生き抜くこ



とだけが大問題であつて、あとの事はすべて此世の事、どうなつてもいゝ事であります。しかしどうでもいゝと思ひ切つて居れる時の方がどうかしなければと計畫し畫策する時よりも、不知不識の裡に忠実ないゝ仕事をやつて居る事もあるでせう。先日は中途半端な事を書いて父上に御心配かけたことですが決して退嬰消極の境に萎縮しとるわけではありません。■■「夕に死すとも可なり」といふ気持がいつも自分を激しいものに駆り立てそうで、それを抑へつゝ病弱の身をいたはる生き方も、これによつて自分の意志が粉■碎されひたすら神への従順を学ばねばならぬ道場としてのみ、自分には■その意義を思はせられて居るものです。＼あれ以来旬日、段々仙台を離れる時期が来たのではないかなどいふ考へに傾いても居ります。あと四五年といふところ、塚本先生石原先生〔虎二〕の心奥に参じて人生の一大事、更に激しく鍛えなほさるべき自分ではないのか、など頻りに考へに浮ぶのです。その覚悟がほんものとなるかどうか、いづれ近く出京の折にはハツキリ決めて参りませう。

八月七日

隆

御両親様

③⑩ 1943 年 10 月 4 日 (官製葉書) II -29

〔葉書表〕

東京都目黒区中根町一八〇 大嶋今子様

勝浦町新官 大嶋正隆

十月四日

〔消印「千葉勝浦 18・10・5」〕

〔葉書裏〕

餘波

舟はなほ陸に居据り荒れさびしきそ昨の名残と道を障さへたり  
いなさ風名残りの波の濁り江におびたゞしかも流れ木のよる  
敷波は鈍色にぶなせど見はるかす沖つろなもにうねりは消えぬ  
海鳴りもいまはひゞかずわだのはら雲居の際ゆやゝに澄み■■わたる

③⑪ 1943 年 10 月 10 日 (官製葉書) II -30

〔葉書表〕

東京都目黒区中根町一八〇 大嶋今子様

千葉縣勝浦町新官 押塚方 大嶋正隆

10 / 10

〔消印「千葉勝浦 18・10・11」〕

〔葉書裏〕

(大学シンブンはこちらでたのみました。健夫君に)(宿は混んで居ます。東京人ゾクゾク)いかゞお過しですか。一向パツとしないお天気續きですが。あらしの来る度毎「殺した祟りだからねー」とおかみさん嘆いて居ます。

みんなみのあらし寄す日はしほかぜのしぬゝにとほるこれの家中やぬちや

壁たゝみ濕ちたるよるの我家には許<sup>わぎへ</sup>多<sup>こゝだ</sup>も群るゝ磯のむしかも

覺えずもあな■聲あげぬゆめさめぬ、ころもふるへば醜のふなむし

これはこの間のとは別口、昨夜のことです。シケつゞきで二週間ばかりトビばかり喰べて居ますが、刺身・煮付・塩焼・酢の物・肉ダマ・生乾・さてはショーガと味噌と一緒にすつて鮑貝に入れて焼いたのに至るまで、一つものをよくこんなにあの手この手とやるものと感心しながらお膳に向ふことです。海もいまが端境期なのでせう。来月になればきつとよくなります故、宿から手を廻せば何とか少し位はお送りも出来やしないかと思つて居ます。

あかねなす入江の波のさゆらぎに魚一つ跳ぶ音の寂けさ

こんな風の秋のゆふべは、まだ一度だけきり出会ひません。＼メタボリンはどうでせうか。小生にはあれが夏の消化不良續きから脱却の轉機でありました。ですからこれがきれてはまたなりはせんかと少々慌てたのですが、それからすでに十日近く、消化機能ももう付焼刃ではないようですから御安心下さい。無理に都合して頂かなくても大丈夫やつて行けそうです。 また。

### ③ 1943 年 10 月 16 日（官製葉書）Ⅱ -31

〔葉書表〕

東京都目黒区中根町一八〇

大嶋正満様

勝浦町新官

大嶋正隆

十月十六日

〔消印「千葉勝浦 18・10・17」〕〔丸印「大島 18・10・19」〕

〔葉書裏〕

○

ソロモンのいくさをいたみ漁翁<sup>あまおち</sup>さいかに念ふやとわれに言問ふ

病むわれのことはさへや群肝<sup>むらぎも</sup>の騒ぐこゝろを支ふるらしき

たゝかひのきびしき現實身<sup>うつゝ</sup>に負はむますらをごゝろわれなけなくに

——これやこの一萬九千九百のあらたままつり國こぞる日に——

○

デング御講演のこと、新聞に拝見しました。小生その後消化機能快調に、能ふ限りの静養を續けて居ます。バスがなくなり、めつたに勝浦へ出られなくなつたので少々不便ですが。

### ③ 1943 年 10 月 20 日（官製葉書）Ⅱ -32

〔葉書表〕

東京都目黒区中根町一八〇

大嶋正満様

今子様

勝浦町新官

大嶋正隆

20 / 10

〔消印「千葉勝浦 18・10・20」〕

〔葉書裏〕

冴え冴えと透徹しきつて膚にしみる様な東北の秋とちがつて、こちらのは飽くまでも穏和ななまぬるいまでの気温の秋天であるには面喰つて居ます。此分ではポケット付きの着物もまだま

だ當分活躍のこととせう。多年慣れたせいか何だか秋は「秋霜凜烈」といつた感じでなければ、  
 といった様な気もしますが、その烈しさ鋭さを恋ひつゝも、やはりそれは今の自分の耐ふると  
 ころに非ざるを思ひ、此地におかれしことを感謝せずには居れません。

みんなみのみなとの町の朝市にまありんごをうらなつかしみ

手に持たるあかきこのみのひとつにも秋の津軽の野づらしおもほゆ

へやぬちに匂ふこのみのうつり香のさはやかにしてこゝろたのしき

お天気つゞきで海はいよいよ澄み、ますます穏やかです。万葉人が「武庫の海にはよくあらし」  
 など歌った感覚はきつとまたこの様な日のものだつたのでせう。その私のところでも「ニハ」  
 と観じ得る様な海、近頃はモグリ、モガリの舟でにぎはつて居ます。これも昔の「玉藻刈り」  
 と形は同じとせう。——でも中味にはえらいちがひがある様です。

わたの底沖つ暗礁<sup>いくり</sup>のかじめすら今は刈るとふいくさの資<sup>しろ</sup>に

勝ちぬかむ火薬のしろとわたの底深く潜<sup>かつ</sup>ぎて海人<sup>あま</sup>は玉藻刈る

トモスレバアト

秋晴のうらゝを安み玉藻刈りあまの小舟のみだり出づ見ゆ

↓ヒキガチデス

それも潜水服でもぐるのですから中々大がゝりな事です。＼ヨーチはありがたく且つ結構に頂  
 いて居ます。先日勝浦で見付けましたがドロドログシヤグシヤすぎて断念中でもありました。

#### ③4 1943 年 10 月 22 日 (官製葉書) II -33

##### 〔葉書表〕

東京都目黒区中根町一八〇

大嶋正満様

今子様

勝浦町新官押塚方

大嶋正隆

十月廿二日

〔消印「千葉勝浦 □□・10・22」〕

##### 〔葉書裏〕

〔正泰〕  
 ○泰ちゃん来訪

思ほえず来ませし人のくさぐさのはらから語り聞けど飽かぬかも

たらちねはやすけくいます、園<sup>その</sup>のいもたべたりなどゝ語るもよろし

家離<sup>さか</sup>り逢はず久しみかりそめ<sup>たぬ</sup>のそゝろ語りも樂しかりける

この朝けあみにあがりし鰺<sup>あぢ</sup>の魚<sup>うを</sup>の刺身の味も常にまされり

管制<sup>ほ</sup>の灯<sup>むか</sup>かけ静かにい對ひて箸とるしまし祈るこゝろは

——隆——

よせ書きをするつもりでしたら御本尊は今日帰京のみかちやんが案内してあげるからといふ  
 「おいしいアンミツ屋」なるものにつられて町へ出かけてしまひました。雨の収まつたあと、  
 拭つた様な快晴の海が輝いて居ます。押塚でハリキツて御馳走を出してくれるので主客共に満  
 悦中。今日はまた新官で珍らしくデリシヤスなど手に入れました。ゆつくりからだを休め、忙  
 しく胃を働らせて御帰京のこととせう。

## ③⑤ 1943 年 10 月 28 日（官製葉書）Ⅱ -34

〔葉書表〕

東京都目黒区中根町一八〇

大嶋正泰様

勝浦町新官

大嶋正隆

28 / X

〔消印「千葉勝浦 18・10・29」〕

〔葉書裏〕

——雄吉さんがお見舞に来るなど言ふてきたが、もう少しあとにして下さるよう返事し  
いた。御親切はありがたいが、まだ長い間のはなしはできないようだから。——

おはがきありがとう。絶好の時に来、また戻られたことです。あのあとは連続の時化でした。  
それで思ひがけなくも遠く仙台から、然も小生の身廻品などを持って石原君<sup>〔純〕</sup>が来てくれたので  
したが、とうとうお魚を見せられずにしまったのでした。こちらはアヂの刺身など夢にも見ら  
れん。

はろけくも訪ひ来し人を海荒れにさかな喰ませずかへしつるかも

それから新聞によると当日は縣下總動員にて一万人からの買出部隊中八百人が悪質として云々  
などいふこと、経済係殊に二等客に多し、などゝあつたです。近くおさかなも持てなくなるよ  
うな形勢、壮行会までに発令になつては少々困るですね。色々時局の波動は世智辛く、こゝの  
別天地もいつまでのことでせうか。昨日主人の話によると、押塚も近く（来月から）縣の健民  
鍊成なんとかといふのゝ指定になつて常時三十人ぐらひ各官廳の鍊成者を引受けねばならぬそ  
うです。エレーことになつたもので少なからず恐慌です。主人はかゝる際の御奉公の一つだか  
らなどいふとるが、小生の推測するところではこんなことでも進んで引受けぬと不要不急の廢  
轉業などいふことになるのだらう。（それと冬枯対策との一石二鳥ならん。）これには驚いちま  
つた。（夜具持参、ごく簡単なメシを出し、一日一円六七十銭見當でやらねばならぬ由也。）ま  
さかまへからの客人追出にはならんだらうがそうなるとうるさいことだ。＼昨日はオイナリさ  
んの日とかでうまい甘酒を沢山ごち走になつた。こちらのは生シヨーガをすり入れる。

## ③⑥ 1943 年 11 月 25 日（官製葉書）Ⅱ -35

〔葉書表〕

東京都目黒区中根町一八〇

大嶋正泰様

勝浦町新官

大嶋正隆

十一月廿五日

〔消印「千葉勝浦 18・11・25」〕

〔葉書裏〕

○前日健夫に告別の手紙をつづる いま君の電話にていよいよ朝鮮行と決せるを知つて  
會はずともよしとは書きつ、ますらをのををぐゝろ強く耐えむとぞおもふ  
心強く言ひはしつれどわかれなんいのちと念へばなみだあふるゝ  
そのかみのますら<sup>みおや</sup>たけ<sup>たけ</sup>をの先祖たち雄叫びしてや首途見まさむ<sup>かどで</sup>  
初冬<sup>みおや</sup>の海荒れたれや玻璃越しに波とゞろきて湧きたぎつ見ゆ

——無事にたつて行つたことゝ思ふ——

武運を祈りつゝ、聖意のまゝをなし給へと願ふのみ——

③ 1944年1月1日（『歌集 上総の海 大島正隆遺稿』所載、もと官製葉書） I -18-2

〔葉書表〕

東京都目黒区中根町一八〇

大嶋正満様 今子様

勝浦町新官 大嶋正隆

元旦

〔消印「千葉勝浦 □□ 1・2」〕

〔葉書裏〕

謹んで新春の御祝詞申し上げます。

願くはこの年も吾が家が祖父上に創められし信仰の家庭たるに適はしく、いよいよ混沌たる世相の裡に常に清らかな光を保ち得ますように。

父上の劃期的なる御研究の上には更にいや増す御成果を、そのため寧日なき御精励の上に上よりの御支え豊かならんことを祈上げます。

母上には何を措いてもよき御健康と御心の平安を。どうか今年は嶽の新緑を賞で新官の鰯を現場で召上る、といふ様にまでおなり下さいませ。

弟妹達一人々々どうかそのそれぞれの持場に於て今年も十二分の働きの許されますように、各自の上に御祝福豊かにあれ、特に前線にある人のことなど想ひめぐらして居ます。

小生は天地の恵みと肉親の愛情とに護られ、更にまた多くの信仰の友の祈に支えられつゝ、こゝ南總の地に生命を拾ひかへせし昨年でありました。御意ならば再び此地より完く癒えて巢立する此の年でありたく思つて居ます。